

ときわ動物園のシロテナガザル 2 家族集団における社会関係

尾平野 未裕

[序論] シロテナガザル (*Hylobates lar*) は、強い樹上性を示す類人猿の一種である。歌と呼ばれる特徴的なコールを発声したり、腕で枝にぶら下がり体を振り子のように揺らすブラキエーションを用いて樹上を移動したりする。集団は1頭のオス、1頭のメス、及びその子で構成されるペア型である。本研究ではシロテナガザル 2 家族集団の行動を観察し、社会的行動の種類とその相手を定量的に調査した。

[方法] 本研究はときわ動物園（山口県宇部市）の 2 集団を対象に実施した。集団 1 のオトナオス、メスのペアと2歳のオスの子、アカンボウ、集団 2 のオトナオス、メスのペアと7歳のオスの子、4歳のオスの子、1歳のメスの子の9頭のうち、観察期間中に誕生した集団 1 のアカンボウを除いた8頭が観察対象個体であった。放飼場は2つの島（それぞれ約 190 m²）と動物舎で構成されていた。総観察日数は21日間、総観察時間は108時間であった。1セッション30分の個体追跡法を1頭あたり27回行い、活動内容や個体のいる場所を瞬間サンプリング法で、社会的行動を全生起法で記録した。また、個体の近接関係を30分ごとのスキャンサンプリングを用いて計216回記録した。

[結果・考察] 各個体が利用した放飼場の時間割合を、木の上部、中部、下部及び地面の4つに分け解析した。2つの島にはほぼ同じ高さの木があるにも関わらず、集団 1 では全ての個体が最も多く利用したのは地面であり（平均 71.7%）、集団 2 では全ての個体が木の中中部で過ごすことが最も多かった（平均 41.8%）。この結果は、樹上性の高いテナガザルでも飼育下では地面を頻繁に利用する場合があることや、父母の滞在する場所の好みに子が合わせるようになり集団の「文化」と呼べるような特徴が作られているのではないかと考えられた。

集団 1 のオトナオス、メスそして2歳の子の3頭は互いに27%の時間を2m以内で近接していた。集団 2 では、母と1歳の子の近接が61%と最も高い値であった。4歳のオスの子は全体の54%の時間でいずれかの個体と近接していた。一方で、7歳のオスの子がいずれかの個体と近接していた割合は26%であった。集団 1 のオトナペアの近接率が34%であったのに対して、集団 2 のオトナペアでは6%と顕著に低かった。

行動の生起率を両集団のデータを合わせた8頭の平均値として算出したところ、休息が41%、社会的行動が23%、移動が22%、採食が14%であった。野生集団と比較すると移動は同程度で、休息と社会的行動の割合が高く、採食の割合が低かった。採食の割合が低いのは、この集団は観察時間外に動物舎内で餌を与えられていたためだと考えられた。また、餌を探したり外敵を警戒したりする必要がないことで休息の割合が高くなっていたのだろう。移動の割合が野生場面と同程度となったのは、ブラキエーションが出来る樹高の高い木が複数設置されている豊かな環境の島で過ごしていたためだと考えられた。

集団 2 のコドモ3頭が社会的遊びを誘いかけた回数や誘いかけられた回数を調べると、年齢が上がるほど回数が減っていたことから、未成年期には成長に伴って社会的遊びが減少することが示唆された。また、集団 1 の父は、オトナではあるが多くの社会的遊びが見られたので、コドモにとって貴重な遊び相手となっていたと言える。集団 2 の4歳のオスの子が行った社会的行動は、母に向けたものが最も少なく、きょうだいとの社会的遊びが頻繁に生起した。以上のことから、テナガザルのコドモでは、離乳後は母との関わりが減り、父あるいはきょうだいとの関わりが増えると考えられた。つまり、父や年上のきょうだいが社会的遊びを通して、子育てをしていたのではないかと考えられた。（比較行動学）